



桂園竹譜卷之五

す やまゆけ

一名美竹 一名長竹

漢名或著箭といひ筍をさかゆけはこ漢名を筵一名

箭萌といひは雪國の山よ生れ多小竹小し信濃

よ多し 詞草小をさかゆけは似て幹高く本根屈曲はと

一家いへは加賀越前等よ産見るものむは葉箬

より毛至て長大し葉邊變白せは幹は矢竹よ似

て每節平うし高き一丈許大さ指の如し 肥前

の大村よりしるものその節間殊よ長し 和漢三

物かり舟し大和の吉野山城に鞍馬紀伊の熊野 才圖會 即一

南岐山

竹

等の諸山のゆゑ其名高し。大古の時五百箇野  
簾日本書紀しるす。山生のもれは、此筍籜青緑  
ふし、籜籜籜拵るときは色白し。是れ北國地方にて  
大竹稀なるを以て土民古より此筍を採て雪花菜  
と蓋をりて藏し置て食用と。西土も周禮  
の筍をいへ彼土も此筍を食用し供せし由て  
来ふと久しきことなり。扱西土も矢し作る竹數  
種ありとしるも古より會稽の産とす。此名高  
く即今のまじりけふしと山居賦しるす。海筍筍るは  
和漢三才圖會しるす。大村の筍竹葉大於馬蓀と

しるす。暗合のもの也。蓋し大村の産と此竹は、その所を得  
て本根としるも屈曲せし矢し作る。至て此竹は、まものな  
かへしるも古より皇朝も矢し作る。尋常の  
筍筍よしと此筍筍を用ふる。張聞成允筍筍と諸國  
山中は極えて多きものあり。今、肥前人の用ひ  
しるす。此竹を以て矢し作る。是れ勁強西土  
會稽の産と劣らざる。明らかし。  
日本書紀神代卷云、使山雷者採五百箇真坂樹八十五箇  
野槌者採五百箇野簾八十五箇  
萬葉集卷第二相云、水簾苜信濃乃真弓  
風雅和歌集云、たのむるのちをきとちりて是は、

竹の皮をむく思を蜈蚣に寄して以て蜈蚣を鞍馬の福と云ふ

古今著聞集云石泉法印鞍馬の別當也彼は云く或人多く海へけしめると或人の許へつりてと云此竹を鞍馬

の福と云ふまゝゆきまゝしるすもよしと云むるは和訓

筍の皮をむく思を蜈蚣に寄して以て蜈蚣を鞍馬の福と云ふ

和漢三才圖會云箭筈竹葉大於馬條而竹似鳳尾竹節

間長肉最硬用竹箭筈甚佳出於肥州大村

本草一家言云一種似筍而幹高本根屈曲筍甜可食代

欵冬莖養食俗呼鈴竹即筍類也

用藥須知云筍葉筍正文ス夕ケノコ箭竹萌也出禮記内

則葉筍正文ス夕ケノコ箭竹萌也出禮記内

周禮職方氏云東南曰揚州其利金錫竹箭

爾雅釋地云東南之美者有會稽之竹箭

山海經云竹山云云其陽多竹箭箭筍也

又云踰次之山云云其下多竹箭

又云翠山云云其下竹箭

又云暴山云云其下多竹箭筍

山塘賦云二箭殊葉箭大葉云云

華夷花木考云篠幹小節長葉大堪作箭俗呼曰箭竹

會稽縣志云箭竹別名曰篠幹直可以為矢所謂會稽竹

箭是也

邵武府志云篠竹一名箭竹幹小節長可以為箭周禮揚

州之域其利金錫竹箭是也  
 東陽縣志云山<sup>竹</sup>幹細而節長可為筆管筍味極佳土人採  
 之入城市即爭取之所在皆是箭竹中實如箭葉甚大俗  
 名箭筍利用實多  
 筍譜云一名筍自注云箭竹萌即會稽筍也<sup>竹</sup>  
 又云周禮揚州之利竹箭亦有筍萌之別名矣舉成數實  
 物惟筍竹萌也皆四月生也





其高さ大抵五六尺より一丈を徑三分餘每節相去と四  
五寸枝と中幹より以上より生しそまへて獨枝より一丈の  
高さ本幹と同じ或は四枝或は二枝ありしもの葉  
も其梢抄より多しはきて六葉を以て一朶とし或は四葉  
五葉ありは下より一二葉の枯落しそまへて葉長さ一  
尺一寸廣さ二寸八分許す肥地より植るもの長さ一尺五寸  
餘廣さ三寸二分許す至り葉の正中より尋常の熊笹  
と同じく葉本より葉先より通して一縱小道あり其左右  
は二二三道の細縦理相並ひてともより葉本より葉先  
に至る此種蝦夷地方より産するもの風雪より襲はれて本  
根をのみと彎曲しん状弓影の如くたれとも他國より

産するものありしは是より每節下紫黑色より斑  
紋ありしは斑每幹上節より染出て下節に至るものと  
も大方を半すかへ一節間より紫黑色ありしもの少り  
す此竹中幹より以上より青色より尋常の熊笹  
と同じく斑紋絶たず此種を今小笠原相州公本所柳  
嶋の別荘より有りて數百萬幹池邊より叢生し灑々最愛  
以てし白河侯大塚の下邸より多しこれ即延喜  
式及び和名鈔より載り處の斑竹なり畢竟此斑竹を以て  
竹の一種斑紋ありしものありし肥地より生するもの高さ  
一丈許す至りしものありし竹と同じく採て以て  
竹箭とするは魚より故華夷花木考より斑竹杭産者堪

作箭と云々本邦より遠江延喜式豊後和漢三才圖會越前肥後土佐本草綱目啓蒙の餘諸州より出づ目啓蒙一種暈竹一名苔竹一名湘妃竹一名淚竹一名湘竹一名靈竹何此竹方時每點上苔錢封之甚口土人斫竹浸水用草穰洗出苔錢則紫暈爛斑可愛此真湘中斑竹也漢隱居詩話しる本邦より日向及び相模の箱根山中より國史草本昆史考出づ衡志虞産於吳越諸山者其斑紋雖不及占粹湘妃然作器具所用最廣秘傳花鏡赤籜竹真珠竹兩點竹雲竹清白竹龜紋竹及び道州斑竹顧家斑竹電斑竹舍利王斑竹何しる和産しる詳しる

延喜式

内藏

云斑竹千六百隻

遠江國所進

和名類聚鈔

類竹

云斑竹兼名苑

云一名淚竹

此間斑竹音篇遲久

和漢三才圖會

云案虎彪竹出豊後

姥之嵩

筱竹之類而

竹黃白色有黑斑文微似虎皮之紋故名之用為節為煙

筒佳

大和本草云斑竹漳州府志云節間有斑文似湘妃淚痕

所餘者今案本邦處々ニあり

本草一家言云瀟湘竹一名斑竹和名虎斑竹トラフクケ薩州地方

産之土人呼鷓胡淡竹

本草綱目啓蒙云

斑竹

皮上

黒斑

アリ

云豊後越

前肥後土佐其餘諸州ニ出ツ大小ノ別アリ臨桂雜識



二品類ヲ詳ニス唐山朝鮮ヨリ来ル杖及机卓等二造  
ル者偽リ多シ紫ニ點斑竹法ニ事林廣記ニ研磨石五文一  
處再細研入礬灰汁一處調勻點之  
候乾楷洗斑痕不落ト云々  
東遊記云秋田津輕邊極北地故松なく竹あり云  
熊笹甚多一深山を皆是なり彼地より根曲と竹とい  
ひ蝦夷地よりハヤコクニ蝦夷よりハヤコクニ尤大なり  
ふと一長さ八九尺ふと一を杖程るもの多し  
國史草木昆夷考云斑竹今好事の爲筆管をなす  
をハヤコクニ諸山或はハヤコクニ我よりハヤコクニ  
志ハヤコクニ漢隱居詩話ニ竹有黒點謂之斑竹非也湘中斑  
竹方生時每點上苔錢封之云云此真斑竹也ト云々

槃む一日向國ニ往一時端山麓の内ニ斑竹をハヤコクニ  
一漢説と同ハヤコクニ相模國箱根山中のハヤコクニ  
亦あり  
華夷花木考云斑竹甚佳即吳地稱相妃竹者其斑如淚  
痕枕産者篠幹小節長葉大堪作箭俗呼白箭竹案ニ枕  
幹小葉大としんも即沙古丹  
竹小の當り  
竹譜詳録云暈竹出湘全間嶺南安俱有之竿類苦竹節  
長大小不等初竹青上生白苔花漸々著竹上成斑及洗  
去苔靨紫褐斑暈層々間錯殊可人意筍不入食品若他  
斑竹止一沁痕無暈也全州西嶺洞中及鬱林山中出  
者竹色正白斑花尤分明最為上品桂海虞衡志謂之斑

竹云桂林屬縣皆有之所記畧同  
又云赤箴竹真珠竹雲竹雨點竹清白竹龜紋竹右已上  
六種皆暈竹之類彼人但以斑花之似者輒取以名耳  
又云苔竹寰宇記云信州貴溪水南流上源數十里生苔  
竹苔痕點暈狀如琢玉幹直可為杖  
又云淚竹生全湘九疑山中博物志云舜南巡狩不返葬  
於蒼梧之野堯二女娥皇女英追之不及至洞庭之山淚  
下染竹成斑妃死為湘水神述異記云舜南巡葬於蒼梧  
堯二女娥皇女英淚下沾竹文悉為之斑亦名湘妃竹  
又云道州斑竹生高巖小於箭文如螺旋不雜  
又云顧家斑竹述異記云姑蘓之境有陸家白蓮顧家斑

斑竹亦猶花有魏紫姚黃之稱

又云電斑竹出雷州地理志云雷州真斑竹即此物也

又云舍利王斑竹幹有虺文六帖云昔西域舍利王獻樂

有大小匏琴皆以虺文斑竹為之取聲於匏以合律

大平御覽云斑竹博物志云河庭虞帝之二女啼以涕揮

竹竹盡斑今下雋有斑皮竹

北戶錄云湘源縣十二月食斑皮竹筍諸筍無以及之吳

錄云馬援至荔浦見冬筍名曰苞筍博物志云斑皮竹堯

女以涕揮竹竹盡斑也

代檀集云靈竹俗傳孟宗所泣斑竹也其斑以紫為最

典籍便覽云湘竹斑細而色淡有暈中一點紫作籥管最

佳、蘇軾贊為斷世珍物而過者有暈中一類、蔡邕論南管最  
彙書詳注云、斑竹即吳地產、湘妃竹者、其斑如淚痕、杭產  
者不如、亦有二種、出古剡者佳、出陶虛山中者次之、土人  
裁為筋、甚妙、而南管與古剡竹皆單幹、唯此竹有雙幹、故其竹葉  
學圃雜疏云、斑竹竿不中食、大而鮮澤者、色用可亞湘妃、  
亦佳竹也、今下書言斑竹、皆指此竹而言、向處將不之矣  
日詢午鏡云、斑竹有二種、出古剡者佳、出陶虛山中者次  
之、余攜數竿回、乃陶虛者不甚佳、吳人甚珍重、以之為扇  
材及文房中秘閣之類、大許值錢二三百文、今何之、其葉  
格古要論云、湘竹出廣西、斑細而色淡、有暈中、七點紫、與  
蘆葉上斑相似、作簫管最貴、

群芳譜云、滇之新化州山中生細竹、長者十餘丈、本粗而  
末細、其上有虫蝕處、去之則斑痕如湘竹、斷以為箸、甚雅、  
致富全書云、斑竹又名斑皮竹、長短大小不等、可作扇邊、  
又與紫竹並取、充文房諸具之用、竹葉紫、其文下、  
博學彙書云、外紀蘇東坡于富川、嘗以餘墨洒竹上、而枝  
葉皆有墨痕、所生新竹皆然、其木節、其味、其色、  
江西通志云、種東坡謫黃州、過瑞邑、援筆賦詩、洒墨于竹  
而成斑、故潯多斑竹云、其音、其味、其用、  
江陰縣志云、斑竹質脆、其文斑、其味、其色、  
福州府志云、斑竹三山志名為研竹、  
八閩通志云、斑竹永福縣鶴洋多產之、差及湘江者、

海澄縣志云斑竹節間有斑文似湘妃淚痕所餘者又有  
一種名瀟湘竹竹葉如  
靖江縣志云斑竹有紫斑一名湘妃竹山中者及之  
常熟縣志云質脆而有斑者為斑竹可以適用  
懷寧縣志云斑竹篾可製器  
金壇縣志云斑竹相傳自湘江來猶是湘妃淚灑遺竹  
安慶府志云斑竹有黑斑類湘妃竹  
太平府志云斑竹一名湘妃竹青幹有紫斑文可治器  
新城縣志云斑竹一名湘竹可作器用  
番禺縣志云斑竹如紫竹青中間有斑點而無螺紋不如  
湘竹

台州府志云斑竹斑暈紫黑而點大又號越竹

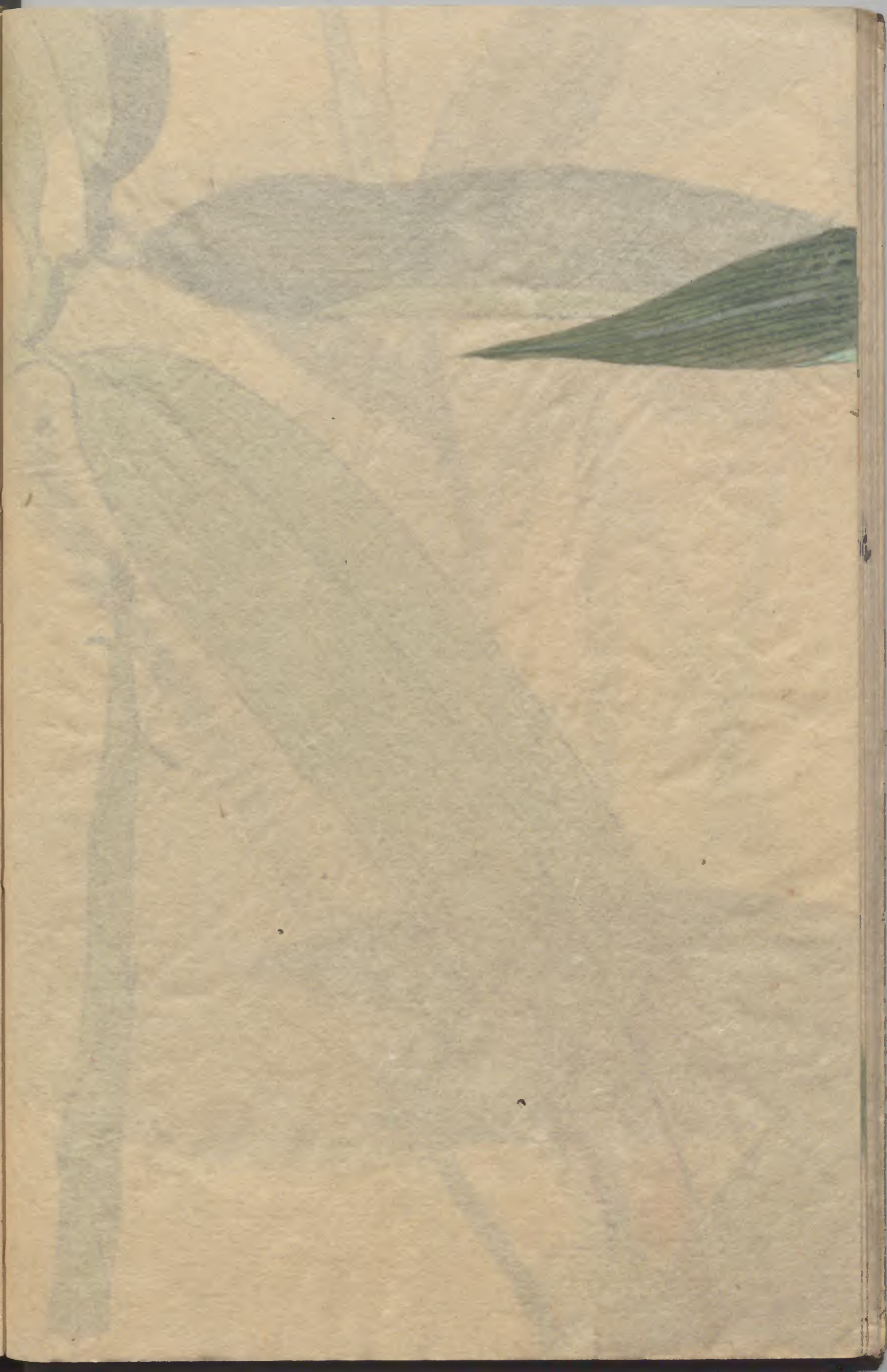








東藪竹譜所載斑竹之圖



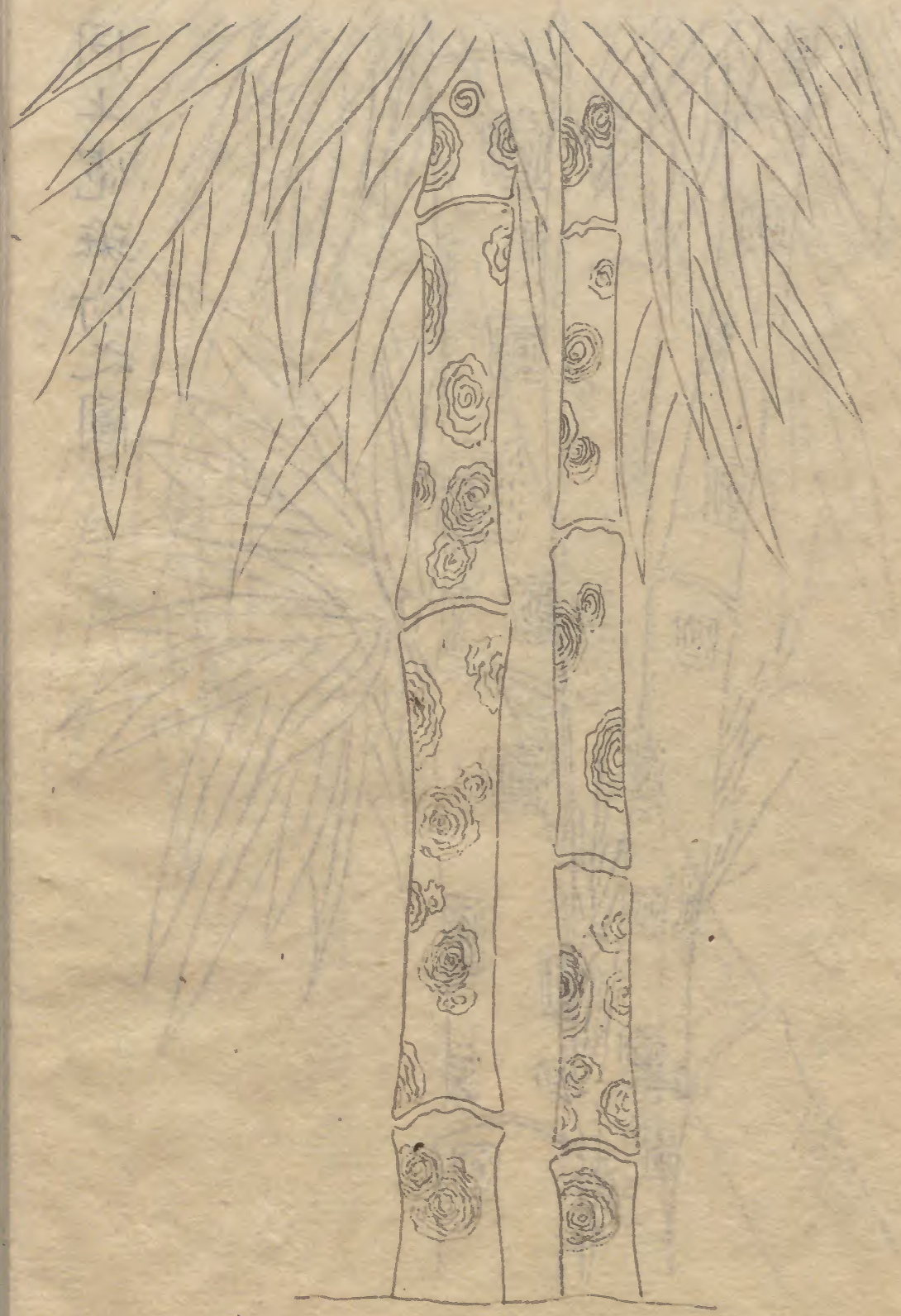


同上暈竹之圖



東坡竹譜卷之八圖

又一種暈竹之圖  
原書稱江浙  
斑竹者非

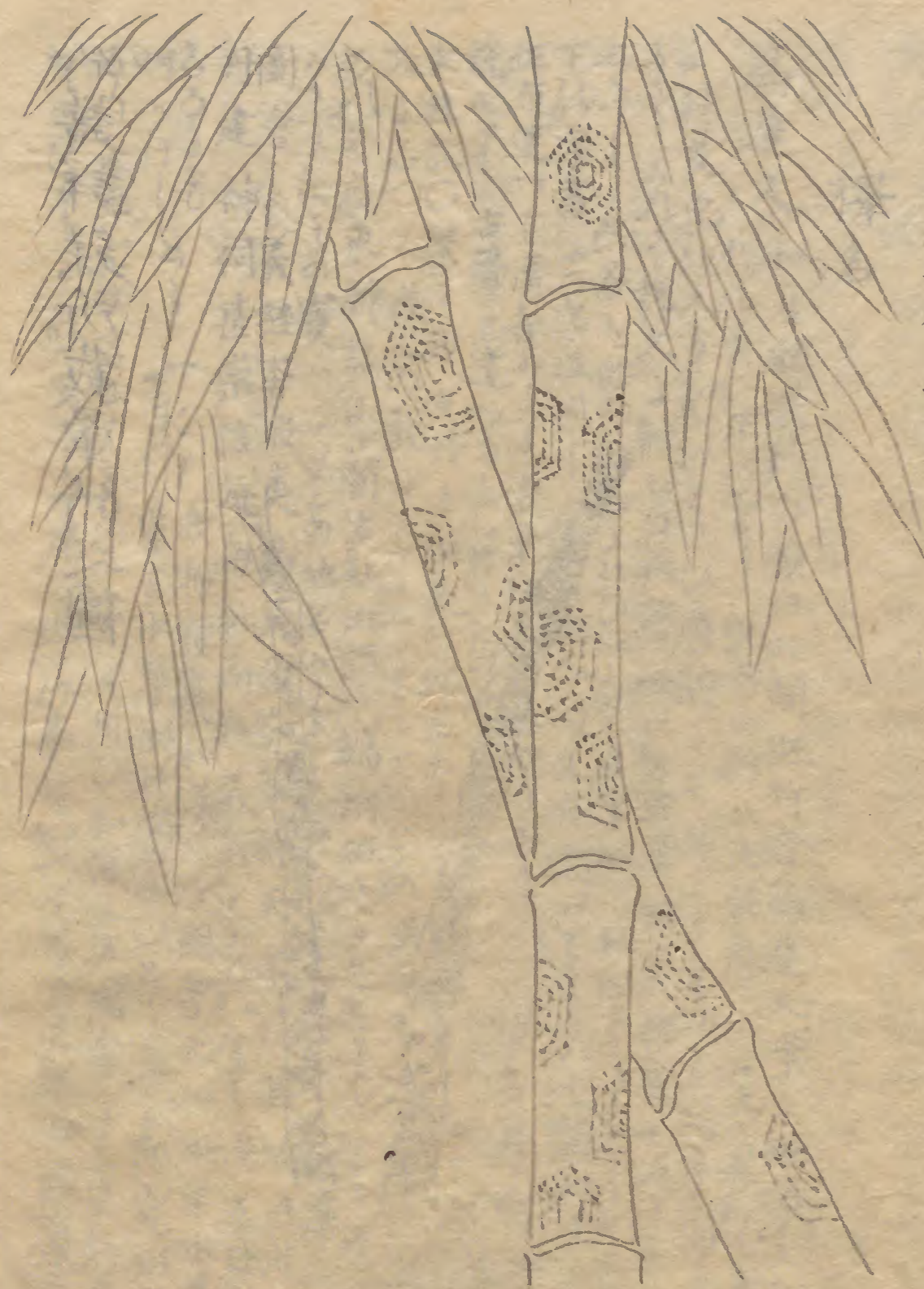


同上電斑竹之圖

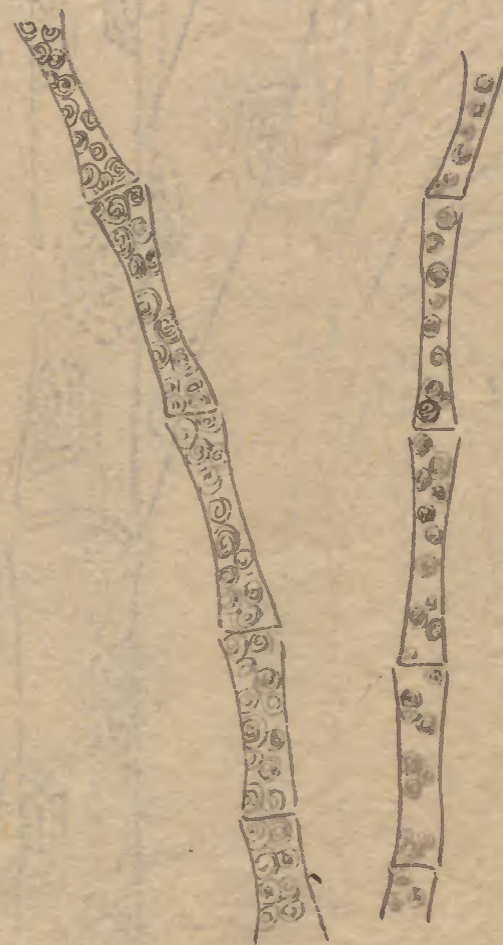


竹之圖  
電斑竹  
竹之圖  
竹之圖

同上龜紋竹之圖



竹譜詳録所載暈竹之圖



釋名

篇遲久

和名類聚鈔○順曰此間斑竹音篇遲久案下斑篆文辨

辨皮免切又方免切といひ唐韻下辨从支辨聲と云えり

下辨字書下二字混同一遂下斑を以て布還切と云えり

斑布還切古漢音の方免切を吳音より云ふ

東遊記○案下沙古丹を蝦夷の地名なり

故下名つゝ或人の説はシヤコタンをシヤコハンの誤り

ありて廣東新語下開生虱斑謂之鷓胡斑と云えり

丹建神祠甚崇信每島民皆敬服終天年死其地曰沙胡

明らけしと云ふたけ家言本草綱目啓蒙○と云ふ即虎斑の義

を用ひたり彪も虎の斑なりといへり又庶物類纂下と

らふ竹を越後の方言と云ふは竹を薩摩の方言と云ふと此即ち中畧るの海をめぐりて

今俗らるる竹を多けと云ふは即ち安南の西北に接し其國斑竹製品あり最初此竹を煙管を造り渡り故に玳瑁竹和訓今煙管に用ひ細竹を造りて

竹譜詳録漢隱居詩語彙書詳注八閩通志江陰縣志安慶府志玳瑁竹或大或小或勻或細或不等或重暈或斑皮竹

花斑竹總志研竹福州府志引三山志案玉篇玉研摩也

摩研し斑を出に意暈竹詳録苔竹寰宇記湘妃竹竹譜詳録

淚竹詳録湘竹縣志靈竹代檀赤籤竹竹譜詳録○案玉篇玉

如くたを命せし各竹冠を後に加ふるは真珠竹上

雨點竹上雲竹上清白竹上龜紋竹同上案丹洲圖竹上

節間矮促よし其状龜甲紋よし似ざるを道州斑竹上顧

家斑竹上電斑竹上舍利王斑竹上

本草一家言云瀟湘竹一名斑竹云云案瀟湘竹と別種

此瀟湘竹を湘妃竹の誤寫と云ふは彼地より根曲り竹と

東遊記云秋田津輕邊熊笹多し相似て別種ありを混し

博物志云堯帝之二女常泣以其涕揮竹々盡成斑竹案斑

文何事のふれ天稟よ〜〜〜後此竹も〜斑  
 文を生せ〜ハ何〜珍多を博物志〜  
 俗談を〜其海〜  
 詩賦〜  
 斑竹と〜  
 類の俗談〜  
 漢東坡の斑竹ハ〜  
 諸書〜  
 疊暈〜  
 斑暈〜  
 暈を〜  
 理何〜ヤ

箬竹

箬竹一名箬竹一名箬筍一名箭竿一名箬箴一名相若  
 一名箬筍も箭竹の類も〜  
 一尺の間〜  
 數節何〜  
 葉太  
 さ履お如く譜も〜  
 扇の如〜  
 本草此竹を詩衛風よ〜  
 滎言  
 淇澳の緑竹譜〜  
 葉は今長崎〜  
 來は高  
 船の箬葉と同一〜  
 蓬〜  
 作れる〜  
 邦産絶〜

此筍も魏の特漢中の大守王園〜  
 奉〜  
 冬生〜  
 上〜  
 或も夏秋〜  
 竹譜〜  
 或も冬夏小生  
 五雜〜  
 其風土の寒暖〜  
 遅速〜  
 別種よは〜  
 一種長節の〜  
 郭璞注山海經〜  
 今漢中郡出箬竹厚裏而長節根深  
 筍生地中〜  
 王國〜  
 奉〜  
 蓋〜  
 此竹の  
 筍して〜  
 密節〜  
 即江漢の産る〜  
 後漢書冠帽  
 傳〜  
 代淇園之竹為矢百餘萬〜  
 淇園を  
 殷の紂王の竹箭園〜  
 此竹を以て矢よ作れるも  
 其由來久〜  
 海〜  
 此種も古〜  
 邦産絶〜  
 紀〜  
 長崎〜  
 此葉〜  
 携來るもの〜

少竹何多竹... 詩の緑竹も即此箬竹... 世  
小志... 少竹... 多識の一助... 物せ...

竹譜云、箬亦箇徒、概節而短、江漢之間、謂之箬竹、自注引  
山海經云、其竹名箬、生非一處、江南山谷所饒也、故是箬  
竹類、一尺數節、葉大如履、可以作篷、亦中作矢、其箬冬生  
廣志云、魏時漢中大守王圖、每冬獻箬、俗謂之箬箭、  
又云、根深耐寒、茂彼淇苑、自注云、北土寒冰、至冬地凍、竹  
根類淺、故不能植、唯箬根深、故能晚生、淇園衛地、殷紂竹  
箭園也、見鮑彪志、淮南子云、鳥號之弓貫、淇衛之箭也、毛  
詩所謂瞻彼淇澳、綠竹猗猗、是也、

筍譜云、郿竹筍、自注云、長節而深根、筍冬復皆生、鄉人掘  
土取筍、廣志作箬竹、可作屋椽、山海經同也、  
又云、箬筍、自注引竹譜云、江漢間謂之竿、箬一赤數葉、  
大如履、可以作篷、今詳葉如履、即王彪之閩中賦云、相箬  
也、其筍亦不大、止是箬葉異諸竹耳、又此竹與郿竹同也、  
五雜俎云、箬竹細竹也、長數尺許、其筍冬夏生、可食、近日  
黃日仲詩有箬竹為椽之語、誤矣、  
本草彙言云、箬竹一尺數節、亦可作矢、葉大如扇、俗謂之  
箬箭、可以作篷、  
又云、細竹若箭、可以作箭、  
山海經云、英山云、其陽多箬箭、

又云、牡山云云其下多竹箭竹箭

又云、暴山云云其下多竹箭箭箭

廣雅云、箭箭媚箭也。

釋名

箭竹

竹譜云、安有箭竹、山海經云、媚箭、一作廣雅及玉篇、小箭、莫悲

竹譜

竹譜云、竹名、箭、義秘、切、長、節、深、根、者、玉篇、小、箭、莫、悲、の、概、節、る、と、既、之、箭、竹、同、上、玉、篇、小、箭、莫、悲、竹、譜、より、の、如、く、竹、箭、竹、同、上、玉、篇、小、箭、莫、悲、竹、譜、より、の、如、く、玉、篇、小、箭、莫、悲、竹、譜、より、の、如、く、

箭竹

太平御覽引竹譜云、竹譜云、箭竹、漢江間謂之箭竹、太平御覽引竹譜云、箭竹、漢江間謂之箭竹、太平御覽引竹譜云、箭竹、漢江間謂之箭竹、

箭竹

今本竹譜此文、太平御覽引竹譜云、箭竹、漢江間謂之箭竹、太平御覽引竹譜云、箭竹、漢江間謂之箭竹、

矢、江漢、深、根、者、玉、篇、小、箭、莫、悲、の、概、節、る、と、既、之、箭、竹、同、上、玉、篇、小、箭、莫、悲、竹、譜、より、の、如、く、竹、箭、竹、同、上、玉、篇、小、箭、莫、悲、竹、譜、より、の、如、く、玉、篇、小、箭、莫、悲、竹、譜、より、の、如、く、



正誤

竹譜云菅竹高一尺葉大如履

葉書詳注云菅竹高一尺葉大如履葉は竹譜に菅竹一尺敷  
節といふも此竹の梳節  
一尺といふも誤りなり  
此竹の葉は

飛弾國の溪澗に生る竹筍の名なり此竹  
は熊笹の類にして幹細く葉大いなり其節間より母竹  
に似たりかくる一巨筍と生じて長さ五七寸圍二寸  
五分許状細魚に似て每籜魚鱗の如し此即西土よりも  
涿魚尾竹一名穿魚なり此種は諸國時よりあるものと  
以て飛弾國の産するもの名を以てされども皇  
朝の産する筍を幹中の節間に生じて梢上の葉間に





を生せざる我異なるよし又或人の説よきこと細く即木葉  
石の類も竹葉のものを水中に枯落し一年経て遂に  
魚に化せしむる故に半體を既に魚に化せしむるも半體を  
いまだ化せしむる竹葉のものをいふは河の此魚を産  
する所を飛騨國鎗ヶ嶽河のその溪澗をいふは眞のこて  
く強也といふも即同名異物なり凡無情の有情に化す  
る其類多しゆを竹葉の魚に化すことかたしむるは河のま  
さごと心も河のまさとくをいふこととをいふは國人よ壽  
思へ

竹譜詳録云魚尾竹西蜀邛州西十里許白鶴山白鶴觀古者仙人  
四月老翁得道之所其山生細竹葉上每梢末有細箨左右相對一  
二寸許二箨亦對生如魚尾狀視之宛如細魚人傳四月老翁釣魚其  
下折竹貫之遂成此種又名穿魚







釋名

こころしと 飛彈國方言 此即魚尾竹 竹譜詳録 名義 穿魚

同上 名義  
上と同

正誤

國史草本昆蟲攷云こころしとを今諸處より、陶穀清  
異録云、江湖有一種其葉糾結如蟲狀、山民此曰蚱蜢竹、  
即これ也 葉よりこころし魚を筍の状魚尾の如く、こころし細魚の如きものを  
こころしと云ふ、今蚱蜢竹の如く、葉糾結して、其の如きものと混同  
誤りたり

こほろし やきとこころし

こほろし一名うほろし一名やきとこころし一名うほろし  
漢名を筍竹一名箭竹といふ其幹矢竹細い

高さ凡三四尺或は六七尺その三四尺のものは毎節相あると  
三四寸より六七尺のものは準中を稍疎りその  
枝を筒す天竹の如く獨枝より長し一幹中四枝或は五  
枝を生じ又一幹獨立して絶て枝を以て其の枝却て  
本幹より大ききものより一様なるものと云ふ其葉は  
梢抄し横出して頗る傘蓋の如し每梢大抵六葉にして  
下の一葉を甚細くするものも其餘の五葉を長大より長  
きものとせし七十餘廣さ二寸許新葉を以て青色よりその  
正中は黄白色なる一縦道ありて葉本より葉先に至るまで左  
右より相並ひて細十線路ありてその小二十線路葉本より  
葉先に至るまで全く正中の一縦道は同様にその老葉も葉の



又云小之海さうも熊笹のういさきもはちり

江戸砂子云笹寺も四谷山長養寺といふ大木戸の前より

當寺を笹寺といふと寛永の北沙鷹野の時よりせらふ其

比寺号をるく長養庵といふ庵室より此所敷の中より

小笹隈笹深うけけと笹寺といふとと嚴命りしと也む

しとらするもさるしとと方一坪笹を植てのりむさう

竹譜詳録云福州西郷安樂村有若竹一種葉大長三尺

廣六寸餘新安志云若竹羅生葉大可以苴裹

水経逢原云若生小竹而葉最大故可以之為笠

通雅云若葉大可裹粽史逢者也

閩書南山産志云若葉竹其葉可以作蓬

肇慶府志云若葉如葦而葉極多舟人作蓬皆用俗呼次

蓬葉

建昌縣志云若竹幹小葉大蓬笠之用

邵武府志云若竹其幹高不過尋丈而葉獨大於諸竹今

人以絮船蓬及籠皆此端午人家用以糝

南昌府志云若竹幹小葉長大可造蓬笠

福寧州志云若葉大可為蓬葦如箭

杭州府志云若竹與若同葉長潤可為角黍

八閩通志云若葉似竹葉而大舟人以絮蓬者

右本経逢原  
以下の引書  
廢物類纂引所を以て  
再ひしり載せしなり



Handwritten Japanese text in vertical columns on the left page, including characters like 葉 (leaf) and 茎 (stem).

Handwritten Japanese text in vertical columns on the right page, including characters like 葉 (leaf) and 茎 (stem).



釋名

熊笹

唐物類纂和漢三才圖會本草一家言○案一熊さとも馬笹

和漢三才圖會○馬は焼葉笹増補地錦抄○名義上よりえり

葉の大なるものなり和漢三才圖會よりいへる焼葉

即熊笹の一種なり我前方言○此即隈

竹譜詳録本経逢原○玉篇一箬篠竹而灼切竹大葉也箬同上とるを

ちほきささちほきささ

ちほきささちほきささ

ちほきささちほきささ

ちほきささちほきささ

ちほきささちほきささ

竹譜詳録云、白箬竹所在有之、莖小於箬、葉如掌大而長、



Handwritten text in vertical columns, likely describing botanical specimens or related matters. The text is written in a cursive style on aged paper.

Vertical handwritten text on the right side of the left page, positioned above the illustration.



釋名

ちりまきさう 俗称 此葉角黍をばくむより故に此名なり  
此葉角黍をばくむより故に此名なり  
此葉角黍をばくむより故に此名なり  
此葉角黍をばくむより故に此名なり

五枚篠

五枚篠一名豊後篠一名おのめさうは高さ一尺八九寸と  
或三四尺に至るもの幹極りて細小なりといへども毎節  
隆起せりと頗る雄竹の如し此竹をて根上二三節より  
三枝或も四枝を分ちて三葉四葉一蓋と一葉より以上  
と毎節五枝を別りて五葉を一蓋と一葉の枝長三四五分ふ  
し二節あり葉ハ即其二節上より生して蓋成るなりと以  
てこれを熟視せしむ時唯葉莖のふりて枝るまじし如

其梢上に至るも三枝成生し三葉を一蓋とせり  
ちりと根上の二三節と同一根根上の三葉節の左側より付て  
生する時を其次の五葉を以て節の右側より生し二葉を  
左小向三葉を右小向とせり右より向ふ三葉の中の一葉大は  
て左右の二葉をや少く其大なる一葉を左小向二葉の  
少き根上の三葉とせり大さ畧同一その葉の状大抵雄  
竹に似て雄竹より短くはる闊大より甚薄しとせり  
幹をて葉のつくがこも扁なり中より一線路高く起る葉の  
はるよりこも全く正圓なりと常竹と一様なり今人此竹  
を採瀝を去りて箸と似甚る雅趣ありと此竹を四月に  
未五月のうちに生し状茅針に似てやく扁く其葉紅紫



淡黄の両色相交りて別々紅紫色の細縦道ありと全くも  
ちくの如し  
和漢三才圖會云五枚篠高尺餘葉深青色似篠竹葉而  
短每莖五葉叢生能繁茂植庭院玩之  
増補地錦抄云豊後岳はとほろくにやう似て各別なり  
其葉はとほろくにやう似て各別なり  
其葉はとほろくにやう似て各別なり  
其葉はとほろくにやう似て各別なり





日本書紀  
卷之五十五  
皇極經世一  
天皇御宇  
...

皇極經世一  
天皇御宇  
...

皇極經世一  
天皇御宇  
...

皇極經世一  
天皇御宇  
...

釋名

五枚篠和漢三才圖會云此篠每節間五葉を生さるふすりて名づく豊後篠增補地錦抄云此篠  
もと豊後よりあひのせん俗稱云近時歳暮處々の市に福女の  
来る故に名づく面成此篠は結付て釣さくふよりて  
此名

正誤

和漢三才圖會云五枚篠所謂越王竹高止尺餘者此等  
之類乎葉は南方草木杖云越王竹根生石上若細葉高  
尺餘南海有之南人愛其青色用為酒籌云越王  
葉餘算而竹生此竹より越王竹と云と云越王竹  
枚篠の類と云異なり一種越王節竹竹譜詳録の番馬  
志を引て細如箭幹每一節可為一節故呼越王助竹と云  
此竹も五枚篠より節間至て疎きものなり

さし

こゝろ小竹の總名なりと漢名を竹筱としひ野小あり

野さしとしひ藪よりと根さしとしひ箱根山中よ生

る成箱根さし増補地錦抄今處々の山野及ひ堤阪上

數百歩叢生しさし高さ一二尺葉を女竹に似てや

さし一種八丈篠あり其高さ僅よ一尺を過るその葉尋

常のものに相似あり今白河侯大塚の下邸より此種ハ

西土よいものも越篠の類にあり有さしめ又隅田村

簞摺のさし何れものさしさし上にお出るとなり

江戸いさしの他種類も多さし

古事紀允恭天皇云佐々婆ハニウツヤアラレ乃多志シ

志尔云云さし

日本書紀云云さし

萬葉集卷十一云妹之髮上小竹葉野之

和名鈔類竹引蔣魴切韻云和名之乃一云佐々俗細細竹

也

江戸砂子云鐙摺の笹を以て村若宮近所水母寺より

六七丁を以て北より河を以て八幡太郎義家奥州征

伐の特此所の笹の葉末鐙笈を以て馬上より眺望のま

そあり此笹の丈ありよのまを以て一とのもあり

此笹のひもを以て今も

竹譜詳録云一種出姑獲靈巖山中者極短高者不過二

尺一枝三葉冗細可玩土人呼為趁條

釋名

古事紀日本書紀萬葉集和名類聚鈔〇さうは細小の義小石

語より其義とある八丈竹條俗稱此八丈島鐙摺笹

江戸砂子 笹は 趁條竹譜詳録 葉は珍も玉笠柳除珍切履也

皇朝の作字る 踏し 過行 也

正誤

本草一家言云千里竹和名根條案通雅云似竹之小草有十

寸葉似竹而幹似蘆根實草也蘆山下之可以降火此誤よよ

龍鬚竹

龍鬚竹一名龍絲竹を以て西土より来ふ其幹極を

細小よよ鐵の如くまゝ絲の如く高さ僅よ八九寸の



葉之細小者、結縷草に似たり。此種辰州に生るるよし本草綱目にも云ふ。今所生のもの蓋しその地の産るるよし又一種幹高さ六寸許り根旁別に二白須を生し其長さ本幹より五倍たり。竹譜詳録にも云ふ。此種舶来りたり。聞也。本草一家言云有龍絲竹生山陵莖細如絲。丹洲圖竹云此小竹極細纖堪盆玩一望似結縷草而直親見群芳園中。

竹譜詳録云龍絲竹亦龍須竹生辰陽山谷間高不盈尺細僅如鍼几所以為竹者無不具張得之譜云予頃過一明舊家見盆池崑石上有小竹一竿長六寸許枝葉蒼翠

根旁別生二白須盤<sup>屈</sup>水中伸則長於幹五倍龍鬚之稱疑

於此張南軒亦嘗移寘石解中暮春生筍森然可喜因賦詩云小竹如鍼能具體方春茁筍又堪憐者是也

本草彙言云龍絲竹高盈尺細如鍼出鍼州

本草綱目云辰州龍絲竹細僅如鍼高不盈尺其葉或細或大

湧幢小品云辰州有龍孫竹生山谷間高不盈尺細僅如鍼

秘傳花鏡云龍鬚竹生辰州及浙之山谷間高不盈尺而枝幹細僅如針可作盆玩但遇冬不可見霜雪

閩書南山志云辰州有一種小竹曰龍孫竹生山谷間高

不盈尺、細僅如針、凡所以為竹無不具、前輩詩有小竹如針、能具體、即此也、

龍鬚竹、竹譜詳錄本草彙言湧幢小品○紫龍鬚、即石龍鬚、  
名、  
正誤、  
湧幢小品云、辰州有龍孫竹、  
閩書南產志云、一種小竹曰龍孫竹、  
山堂肆考、  
兒篠、  
兒篠一名、  
高、  
每葉青白色、



釋名

龍鬚竹、竹譜詳錄本草彙言湧幢小品○紫龍鬚、即石龍鬚、  
名、  
正誤、  
湧幢小品云、辰州有龍孫竹、  
閩書南產志云、一種小竹曰龍孫竹、  
山堂肆考、  
兒篠、  
兒篠一名、  
高、  
每葉青白色、

兒篠

兒篠一名、  
高、  
每葉青白色、

人皆少以庭砌間の石傍或も小樹下ニ植てニさう  
 とはり小樹下ニありて年経るものも樹とそ  
 れ高低ありて樹ノ三尺許る時を以てニそ  
 海ニ三尺許ニ至るもの三尺許のものも大抵五節ニそ  
 その梢上ニ五七葉張はけ或も一兩枝を生るものありニそ  
 枝幹並ニ細ふニそ恰も絲の如ニそ  
 和漢三才圖會云児篠高尺許葉最細長八九枚生於頂  
 上有白縦理如線青白相交甚可愛本草所謂龍絲竹指此  
 等糸  
 増補地錦抄云児篠葉のいさねニそ青ニ葉ニ白  
 きニそありて成篠ニありニそ





Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a botanical record or a poem. The characters are small and faint, typical of a manuscript or a book's endpaper. Some legible characters include '竹' (bamboo), '葉' (leaf), and '茎' (stem).

釋名

兒篠 和漢三方圖會 ○此篠極て細小なりしを志ぬる 俗稱 ○  
且愛玩をくまきよりて兒篠と名づく 國俗 ○  
黄赤白の拘りしはしんて細道ありしをのびて柳葉草  
と稱し此葉も青白縦道あり故に志ぬるを名づく柳葉草  
一家言 ○此葉細長柳葉  
如如 故に名づく

正誤

本草一家言云有邊白竹葉邊皆白和名知古篠 葉の邊  
白竹の名 いほこのつらあを志ぬるを知古篠と必し  
葉邊よりうつて白きりのよを名づく

桂園竹譜卷之五終

桂園竹譜附録

竹如意 大龍

竹如意と石川丈山の藏せし所の珍奇物六品のうちの  
一つにしてその長さ二尺六寸九分頭太く末細し其頭屈  
曲して頗る象鼻の如く圍七寸全體飛龍の趣あり故  
にその名を海の大龍といふ一節極めて密にして通計  
二十節その頭の九節下より二節下に至りて巧竹如意  
象鼻龍姿儒雅所執武將亦持中虚以表心兮何抓背為  
といふ其廿六字の銘を二行はりしを蓋して天然  
のものなり 此竹如意丈山之藏物也  
詩仙堂志跋云石川丈山先生三河人也嘗仕 東照大

神君其佳名著于世、不朽矣、浪華之彼、立先登、功遂隱遁、  
 云云嘗於此地、卜築幽栖、方丈之堂、揭古名詩者、三十六  
 人像、題其詩于上、因號曰詩仙堂、年九十歲、没于此矣、爰  
 有三橋氏成烈君者、乃江府之武族、而頃成二條之城、有  
 暇、則來尋先生之遺蹤、欽慕其幽居、高風、與一二同志、寫  
 詩仙之像、洎六物、名器、書畫之類、悉皆圖寫、無遺錄云云

詩仙堂志所載竹如意之圖

桂園竹如意

六指

長二尺六寸九分  
 頭圍七寸



方竹刀

方竹刀一名忠孝全備竹一名天下一品竹と書家雲舟  
藏せしありてその実と明の鄭成功と于澤の物な  
るとしつゝあれを正保の比その子奏爺本邦に持来り故  
有りて河内國金田の人金田庄兵衛としる者の家より客  
をりし時俄に彼成功の義兵を舉るなり告来れりふ  
よりてやうしその家をそとらふ也此竹刀ハその時讓を置  
しそのあわらみたるものありし其長さ一尺四寸五分切  
口より五寸の所に至るまで一節ありし其節も尋常の方  
竹と同じく周圍に鬚根とるるなり此竹實心竹とて海軍實紀  
して頗る星を連ね多ふ如し全體よその草の摸擬

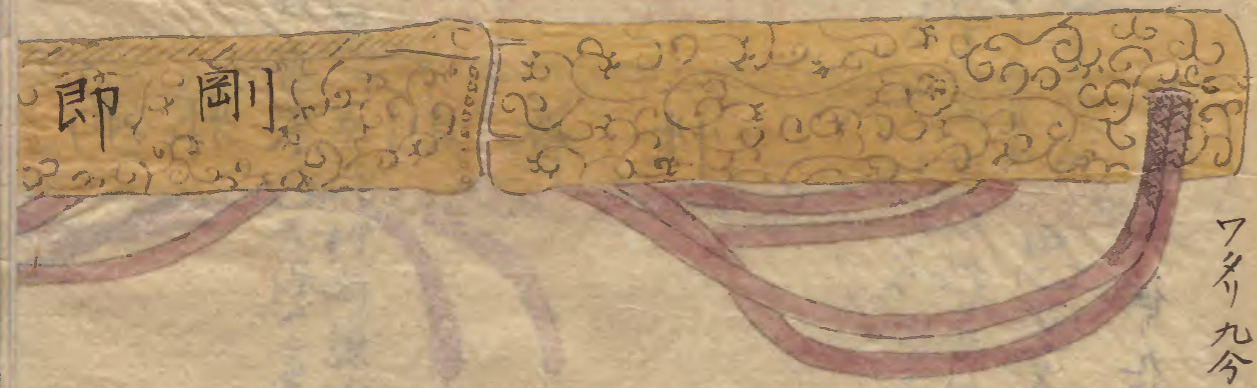
をちりし其節下よと横小剛則折邪柔則養性といへり  
八字の銘をりたるなり此竹實心竹と同じくそのみえ  
極めて深く節のありて周りに三寸六分肉至り厚く竅至  
て少きし其竅内よと上下とも一條乃細白絲ありも  
のも此竹の性よ其實天下の奇竹なり雲舟嘗て遊歴此  
時彼地ふ至りてその竹刀を見り心志きり愛慕  
し遂にその竹刀を帯し一刀の代に強て讓りしなり  
寛政八年のしるるなり李息齋竹譜詳録  
よ齒籜竹大如足指堅厚修直腹中白腴闊隔状如溼麩  
生衣初生時正紫色漸々變紅年老則色白也といへる物と  
蓋し此竹の類なり





余嘗欽父子之義氣英節又稱其僅得一彈丸之地騷擾  
 中興學政也意其賜命天覽與得名家歌詩之頌蓋皆以  
 貴彼父子之義耳今一視之愈益有感於懷云因題斯言  
 贈之文政甲申仲夏東都蕉園主人藤葵書于波津官舎  
 應雲舟画禪之需  
 金田庄兵衛讓狀云此并正保年中小國性節の人  
 我家に持来りて譲置志をもく逗留しつて本  
 心と人との境れあり不思儀のりて世を譲り  
 海あり云云寛政小辰九月十三日云云

ワタリ九分中ノ穴一分



長サ二尺四寸五分ノ  
 方竹ナリ總體  
 唐州ノ彫アリ

折 邪 繁 則 養 性

徑九分中ノ穴二分余

釋名

方竹刀 天下一品竹箱帖○方竹の  
名義ハ詳不存條ヨリ  
冷之 天下一品竹同上○此名は芝山亞相々の余天下  
無双竹同上

挂園竹譜附録終



右挂園竹譜五卷附録一卷岡村尚謙遜所著本書十八卷今合冊  
粗訂正後日復當加校正焉于時天保十二年丑年季冬日精舎主人寫  
了

井國山壽の辨

此書正始於... 天下一口... 此書全前... 同... 前...



無... 同土

天下一口... 此書全前... 同... 前... 辨

省務商農  
書圖  
號第  
册共